

我々から17期下の同窓生 著名な美術家 森村泰正さんの記事が連載されました。佐々木先生のもと高津高校美術部で成長され、波乱の人生を経て、今著名な美術家として活躍されています。

小豆沢愛美子さんがその新聞切り抜きをくださいましたので、ご覧ください。(一部欠けています)

# 語る

—— 人生の贈りもの ——

## 鶴橋の高架下 自画像が生まれる

この小さな仕事場、通称「ツルスタ」は、もとは実家が営んでいたお茶屋の倉庫。マネの「オランピア」に扮した作品なんかも、ここでメイクや撮影をしました。

《生まれ育ち、今も暮らしている大阪の下町・鶴橋。ツルスタはJRの高架下であり、時折、ゴーツと列車の音がして床が震える》

すぐそこが鶴橋駅でしょ。隣の桃谷駅や玉造駅から電車が発車したら音でわかるんで、その時はシャッター押すのを待つ。深夜は静かですけどね。今日くらい静かかなと思ったら電車のストヤったというところが、昔はよくありました。《名画や著名人などに自ら扮して写真を撮る「セルフポートレート

美術家

### 森村 泰昌

①



森村泰昌さん。鶴橋の仕事場「ツルスタ」でMIRIKIRO撮影

ト」の作品で知られる。2016年に大阪で開いた「自画像の美術史」展では、ダビンチやデュララ画家の自画像に扮した》

ずつと取り組んできた自画像的な表現について、そろそろ自分の中で考えをまとめたいという気持ちが強くなりました。

この展覧会では、初めて長編の映像作品も撮りました。美術史で語られなかった真実という設定で、僕が扮する画家たちの告白をつないだオムニバス形式のフィクションです。自画像ってのは私語りの世界。映像の中では約500年の美術の歴史と僕の個人史が、緩やかに重なっていききました。

たとえば、レンブラントのプラ

イベートな語りが、森村の語りとおバーラップする。アンディ・ウォーホルが自分の母との関係を語るシーンでは、鶴橋の当時の自宅前で車いすに乗る僕の母親の後ろ姿が映っています。制作しながら介護をする日々を経て、16年の展覧会の閉幕直後に亡くした母親への、最後のオマージュでした。

(聞き手・田中あれ奈) 全14回

もりむら・やすまさ 1951年生まれ。85年、ゴッホの自画像に扮した写真作品を発表。以降、美術史や女優、20世紀などをテーマにセルフポートレートの制作を続ける。17日、4月16日、東京・渋谷パルコで「アート・シマツの極意」展を開催。

# 語る

—— 人生の贈りもの ——

## 一人っ子 絵を並べて一人展覧会

実家のお茶屋では、いろんな産地の日本茶の茶葉をブレンドして、うちの店の味にして売ってました。小学校低学年ごろには店と同居が一緒になったので、仕事場と家庭の境はなくなっていく。結構忙しかったと思います。

当時は子供が2、3人いる家庭が普通でした。周りの子たちはきょうだいの人間関係の中で社会性を育んでいったと思いますが、僕は一人っ子。さらに学級で前から3番目ぐらいに小柄だったので、スポーツ的な遊びも全然ため。人とくまくやる感覚が養われないまま、他の子と遊ばず空想や一人遊びにふける子供になりました。よくやったのは、観客のいない

美術家

### 森村 泰昌

②



小学生時代の森村泰昌さん。強制的に剣道部に入らされてつらかった。本人提供

一人芝居。今でも自慢できるのは「透明人間遊び」です。透明人間と自分の物語を演じるんですが、相手がいるとうまくやれない自分にとっては、透明人間というのはぴったりの相手なんです。

《当時から今に至るまで、人間との接し方がわからないという》  
運動会の練習で行進をしていたら、なぜか先生が笑ってるんですね。普通は交互に出る手と足を、僕は右手と右足を一緒に歩いてた。みんなが普通にしている身のこなしとか、しゃべってる言葉がうまく使えない。外から見ればおとなしい子だけど、発信の仕方がわからなからなんです。絵は最適な一人遊び。魚類図鑑を見ながら描くのが

好きで、描いた絵を壁に並べて貼って眺めてました。観客は自分だけ、一人展覧会。今でも展示作業は好きなんです。どうも、子供の頃の一人遊びの延長線上にあるんですね。

《小学校時代の6年間、絵画塾に通っていた》  
先生のアトリエに漂う油絵の匂いが魅力的で、油絵をやりたかった。でも、子供には早いと許してもらえませんでした。  
中学の時、夏休みの宿題で同級生が油絵を持ってきたんです。教室に油の、大人びた異国の匂いがする。油絵が描きたいとまた思っ、高校で美術クラブに入ろうと決めました。(聞き手・田中多れ奈)

# 語る

人生の贈りもの

## 美術の「今」興味わいた高校時代

《1967年に大阪府立高津高校に入学、念願の美術クラブに》

面白い所だったけど、思ってた世界とは全く違いました。

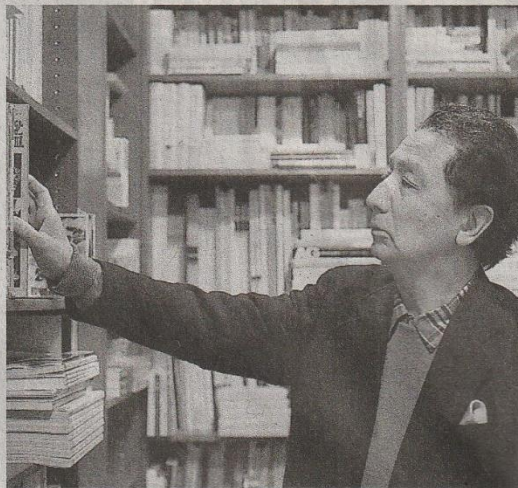
夢だった絵の具箱を買っていったら、先生が「捨てる」と。絵の具はきれいに並べてちびちび使ってたらかかん、徳用チューブで買ってカステラの缶かなんかにぶちまけると。カンバスは高いから、校舎裏でノコギリで切ったベニヤ板に描く。とにかく大きい絵をたくさん描けという方針でした。

顧問の佐々木節雄先生は、在野精神を大事にする方でした。お金を稼ぐ仕事としての「レイバー」と、お金に関係なく一生続ける「ワーク」を使い分けなさい、と

美術家

### 森村 泰昌

③



森村泰昌さんの書庫には、高校時代の愛読書も並んでいる＝MIKIKO撮影

よくおっしゃいました。絵はレイバーにしてはならないと。僕が3年生になつて美術系の大学に行きたいと話した時は「行かない方がいい」と言われました。

1年の頃は印象派やフォービズ

ム風の絵を描いていたけど、やがて「今」の美術に興味が出てきます。唯一の情報源は美術雑誌。ポップアートもあればミニマルアートもあれば、毎月いろんなことが変わっていった。アメリカの現代美術は本当にわからなくて、それでも何か気になるんですね。

《68年に始まった神戸市立須磨離宮公園での野外彫刻を見て、現代彫刻にも興味をひかれた》

登れたり動いたりする彫刻やステンス製彫刻など、当時は建築と彫刻の境がグラデーションでした。絵画よりも彫刻や、空間を使った環境芸術的な表現に可能性を感じて、目移りしていました。

《同級生の中には高校に来ないで学生運動に参加する者もいた》

ませた子がマルクス・レーニン主義について先生と議論を始めるので、授業も成り立たない。賛成か反対か、デモに参加するのかわからないのか。常にAかBかの決断を迫られるしんどい時代でした。

彼らの言う問題にどう答えるか自分の言葉が見つからずモヤモヤしていました。その宿題は今も、ずっと抱え続けている気がします。

(聞き手・田中多れ奈)

# 語る

人生の贈りもの

## 恩師と出会い 写真の概念ガラリ

《浪人中の1970年に大阪万博が開かれた》

2年ぐらい前から美術の世界は大騒ぎでした。万博で一番見たのは鉄鋼館。レーザーと現代音楽を組み合わせたショーに憧れて。

万博会場の外では、国家権力がつくるお祭りを否定する運動、いわゆる反博も起こっていた。唐十郎の演劇や実験的な映画といったアンダーグラウンドの世界にも、僕はすごくひかれました。明るい祭りや闇の祭りが拮抗していて、その間で揺れ動いてましたね。

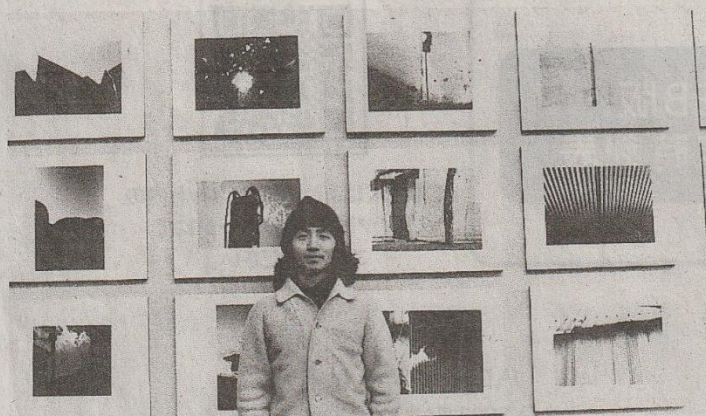
《1浪の後、京都市立芸術大学美術学部デザインコースに入る》

本当は建築とか彫刻が面白いと思っただけで自信がないし、絵にも

美術家

森村 泰昌

4



卒業制作の写真作品と大学4年生の森村泰昌さん本人提供

自信がない。自分が何をやりたいかが、もう一つ見えてなかった。デザインなら幅広いので、「総合芸術としてのデザインをやるんだ」と自分に思い込ませるようにして、進路を決めた感じです。

当時は美術系の大学にも学生運動があつて、僕が入学したのはちょうど、カリキュラムの改革のタイミングでした。専攻の縦割りをできるだけでなくのが基本方針で、デザインの僕らも入学してしばらくは、彫刻や染織、陶芸などいろんなことをやりました。

アーネスト・サトウ先生のもとで写真を学んだのも、専攻にとらわれず受講できる授業でした。貴重なオリジナルプリントを見た

り、感光しないギリギリまで明るくした「明るい暗室」を経験したり。写真の概念が大きく変わって、卒業制作では写真を選びました。

《恩師との出会いがあつた一方、大学生活は面白くなかつた》

制作の時に人がいると気が散るし、お昼ごはんをみんなと一緒に食べるのも嫌で。僕は食べるのが遅くて、追いつこうとすると食べ物が入らなくなるんです。

ずっと家で一人で課題の絵を描くか、学校の図書館で本を読んでもかでした。文学部を受験し直すか真剣に考えました。自分にとって決定的なものに巡り合えなまま、試行錯誤の4年間でし

た。  
(聞き手・田中あれ奈)

◆次回は来週月曜日に掲載します。

# 五口る

人生の贈りもの

## 自衛隊体験は嫌 入社3日目の脱落

《大学卒業後、松下電工（現パナソニック）に入社。新入社員には寮生活が義務づけられていた》

同期と先輩と3人一部屋。もう絶対無理でしょ。お風呂が共同浴場なのも嫌で嫌で困ったし、みんなでズラッと並んでごはん食べなアカんし。地獄みたいな話。

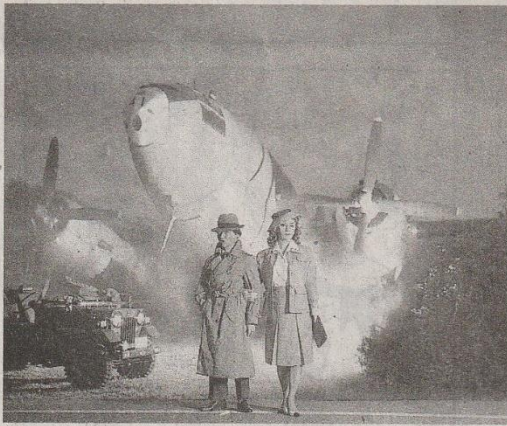
朝は社歌を歌わされるんですよ。みんな最初はダラダラしてたのに、だんだん声を張り上げて大合唱するようになる。みんなが変わっていくのが恐ろしくて。

きわめつけは入社4日目から予定されていた、研修を兼ねた自衛隊への体験入隊。前日に上司が言うには「自衛隊って所はワイルドだよ。茶わんは洗わないんだぜ、

美術家

### 森村 泰昌

5



森村泰昌「セルフポートレート（女優）/バードマンとしての私・1」（1996年）。体験入隊が嫌で会社を辞めた約20年後、航空自衛隊で口ケをした＝本人提供

拭いて終わりなんだ」。それで寮を家出して、自宅に帰りました。数日後、人事と面談して正式に会社を辞める話をした。寮に自分の布団を置いてたので、取りにいかないかなアカん。みんなが会社行って

る昼間に、たたんで持って帰りました。それまでの人生で最大の、完璧な脱落。かなり惨めですね。《高校時代の恩師の口利きで、母校の非常勤講師の職を得る》何十人かの生徒が全員僕を見てるって、自分の一番苦手とする場面。教室の扉を開けるのが怖くて、おなかの調子が悪くなるんです。それで工夫をして。今日はスライドを見せまうと云って、教室の後ろに回って彼らの後頭部を見ながら授業

したら、ちよつとまじでした。《1977年、初めて書いた童話が文芸誌の公募に入賞。気をよくするがその後は落選が続く。非常勤講師をしながら大阪文学学校の児童文学クラスに通い始める》もう絵はやめよう、絵筆をペンに持ち替えるんだと思ってました。でも、文字だけじゃ限界あるなと思つて、今度は絵本作家をめざすことにした。自信作を出版社に送つたけど、無責任なことに、返事はおろか原画も返つてこないんですよね。（聞き手・田中糸れ奈）

もりむら・やすまさ 1951年、大阪生まれ。名画などに扮したセルフポートレートで知られる。

# 五口る

——人生の贈りもの——

## ベネチアへそしてアメリカ巡回展

今、ゴッホの作品は展覧会でリクエストが多いんですよ。みんな「1980年代日本のポストモダニズムの表れ」みたいに位置づけて展示したがる。僕としては80年代と決別するために、80年代っぽくないことをやろうとしたのに。

《キュレーターの南條史生の推薦で、88年のベネチア・ビエンナーレの新人部門「アペルト」に宮島達男らとともに参加が決まる》

資料を送ったら海外から連絡があつて、何か展覧会に出品してほしいと。よくわからないんです。国際展と聞いたので調べてみたけど、ベネチア・ビエンナーレの出品者はもう舟越桂さんとかに決まってる、これは違うなど。当時、

### 美術家

## 森村 泰昌

⑧



ロダンの彫像に扮した「肖像(赤)」(1986年)などをベネチア・ビエンナーレで展示した本人提供

日本のパピリオンに誰が選ばれるかは話題になってたけど、アペルトなんて知られてなかったから。《なんとかベネチアへ渡るも、日本から送った作品が届かない》自分の展示場所に行ったら、誰

かがもう展示してるんですね。開幕前日に作品が来た時にはもう治外法権。固定されていない誰かの作品をどけて、自分の場所を確保した。とんでもない、学生の展覧会と一緒にやんかと思つて。

で、カルチャーショックでしたね。当時の日本では、現代美術は基本的に売れないもの。僕の場合は非常勤講師でお金をためて作品をつくり、展示するだけ。ベネチアから帰って祭りが終わった、元の生活に戻ろうという感じでした。

初日に行ったら、見たことない人の数なんですよ。「君のギャラリィはどこだ」と聞かれたので「アイ・アム・フリーアーティスト」と答えました。他の作家はギャラリィとペアで来てる。日本と全然違う状況選ばれた。(聞き手・田中あれ奈)

《翌年、アメリカ7都市を巡回した「アゲインスト・ネイチャー」80年代の日本美術展に参加》

当時の日本はバブル経済。スモウとゲイシャとフジサンみたいな認識だった欧米で、現代の日本に目が向きだしていた。そんな中で、それまで国内で評価されていたのとは違うものに注目が集まってきたんですね。それで、僕なんかが選ばれた。(聞き手・田中あれ奈)

# 五口ろ

—— 人生の贈りもの ——

## 日本の美術は売れる、に巻き込まれ

《1989年以降、欧米を中心に数多くの海外展に招かれる》

欧米の目が日本の現代美術に向くようになった出発点が、88年のベネチア・ビエンナーレだったのだと思う。世界各国で日本の現代美術を紹介する展覧会が一種の流行になり、その渦に僕も巻き込まれていきました。日本の美術のグローバル化がこうして始まったわけですが、僕は結果的にその先駆けの一角を担うことになって、実は少々責任を感じています。91年にニューヨークでは初めての個展を開催した。すると予想以上に作品がセールされる。「作品が売れる」ということばかりが大きな話題になっていく。日本の美

美術家

### 森村 泰昌

9

術が欧米並みになったということ、功みたいな夢を与えてしまった。なんでしょね。でもそれは、僕が目指していた方向性とはだいぶズレてきているようにも思えた。なんだから次世代の芸術家たちに「売れること、イコール成の作品では、大阪・釜ヶ崎の日雇い労働者たちをエキストラで雇った」の考えは、90年に東京で開いて反響を得た個展「美術史の娘」。展覧会タイトルはキュレーターの長谷川祐子との雑談から生まれた。長谷川さんの言う「美術史の娘」って、ご本人のことであるという面もあるのかもしれないが、僕はこれを自分自身の問題にひきつけて使わせてもらいました。



森村泰昌「美術史の娘(王女A)」(1990年)。ベラスケスが描いた王女の肖像を題材にした作品で「美術史の娘」展で発表された本人提供

あの大作を富裕層に買ってもらうことで得た収益を、制作現場である釜ヶ崎にわずかも還元する。そういう経済の循環を促す装置として作品を捉えてみたというのが、僕の考える芸術経済学なんです。《作品が売れるようになったきっかけは、90年に東京で開いて反響を得た個展「美術史の娘」。展覧会タイトルはキュレーターの長谷川祐子との雑談から生まれた》

西洋と日本の関係は、男と女、父と娘に置き換えられる。ギリシア神話に由来するエディプスコンプレックスを逆転させて、自分の西洋美術史に対する愛憎を、父と父を殺す娘の関係になぞらえたんでしょね。(聞き手・田中あれ奈)

大学1回生の時、同級生で最初から日本画専攻だと決めている学生がいてね、日本人だから日本画をやるんだと何の迷いもないんです。うらやましかったですね。

油絵にひかれて美術の世界に入ったので、僕にとって美術とは西洋的なものだった。現代美術も結局は西洋美術の流れなわけで、一生続けていけるのか迷いがありました。西洋美術への愛と憎が自分の中に同居していたんです。

《マネの「オランピア」を題材にした作品では、裸の白人女性と召使の黒人女性にそれぞれ扮した》  
この時は、人前で裸になるというのはどういうことだろうかとか考えていました。子供時代から何事

美術家

森村 泰昌

10



森村泰昌「肖像(双子)」  
(1988年) 本人提供

も一人遊び的な傾向が続いていましたけれど、いい年をしていっまでも一人遊びばかりではおれないでしょう。生きていくためには、当たり前だけど、他者のいる人間世界と接点を持つ必要がある。その接点として、思い切って「裸」はどうだろうか。

裸、というか身体は自分の最も苦手とするものでした。体には自信が持てなかった。子供時代は小さい手が嫌でポケットに突っ込んで隠してた。ところが後年、「あなたはきれいな手をしている」と褒めてくれる人がいた。そうか、嫌なものでも逆転させれば、好きになれるんだと気づかされました。

三島由紀夫は脆弱ぜいじやくだった身体を、自分好みのたくましい身体へと鍛えてみせましたが、僕の場合は、弱々しいままでという真逆のやり方で裸になりました。

《三島由紀夫が自衛隊に決起を呼びかけ割腹自殺した1970年は、芸大受験の浪人中だった》

衝撃的でした。小説家である三島がフィクションの世界の一線を越えて、行動する人間として決起した。この出来事は、その後の僕の大きな宿題のひとつとなりました。  
(聞き手・田中糸れ奈)

もりむら・やすまさ 1951年・大阪生まれ。東京・渋谷パルコで「アート・シマツの極意」展開催中。



「1994年、雑誌連載を皮切りに『女優』シリーズを開始。連載初回では、東京大学駒場キャンパスの900番教室でマリリン・モンローに扮するパフォーマンスをした。そこはかつて、三島由紀夫が東大共闘の学生らを相手に討論を繰り広げた場所だった」

東大の小林康夫教授の授業で、学生には予告せず突然ゲリラ的にやりました。学生たちの反応もわからないし、工業用扇風機で作ったスカートがまくれ上がる装置も首尾よく作動するかわからない。危うい崖っぷちの場面でした。

あの時のマリリン・モンローは反転した三島由紀夫だったんです。アメリカという、いわば「男」

美術家

森村 泰昌

11



森村泰昌「M's Self-Portrait (駒場のマリリン)」(1995/2008年)。東大でのパフォーマンスを後に写真作品にした=本人提供

に殺された女優と、「女」としての日本に殺された三島。2人はそんな反転した状態で背中合わせになっている双子です。

あの時のマリリン・モンローって武装しないで戦う戦士だった。

パンツを脱ぐシーンがありましたしね。男にならなければ、三島は生き延びえたのかもしれない。生き延びるための三島というイメージを思い描きながら、僕の場合「女優」として900番教室に行きました。

ずっと痛みが伴うテーマを追いかけているような気がします。三島は切腹。ゴッホは耳を切った。西洋画の題材によくなるユーディットは男の首を切り落とす。右足

を切断したメキシコの画家、フリーダ・カーロ。ゴッホと三島とマリリンは僕の中では確実につながっているんです。

「女優のイングリッド・バーグマンに扮した作品では、航空自衛隊の岐阜基地でロケをした」

飛行機や軍用車両も自由に使うて、ずいぶん親切に対応していただきました。そして撮影を終えた後、晴れ晴れと自衛隊の門を出て大阪に戻りました。かつて勤めた企業の社員研修で自衛隊の体験入隊を前に逃走した、あの時の宿題をやっと果たせたと感じました。男ではなく女優としてなら、自衛隊に悠々と赴き、何事かを成し得るんです。(聞き手・田中あれ奈)

# 語る

—— 人生の贈りもの ——

## 自分の言葉 芸術でなら語れる

「1990年代半ば以降、国内外の美術館で個展をする一方、99年に蜷川幸雄演出の舞台「パンドラの鐘」、2002年に辻仁成監督の映画「フィラメント」に出演する」

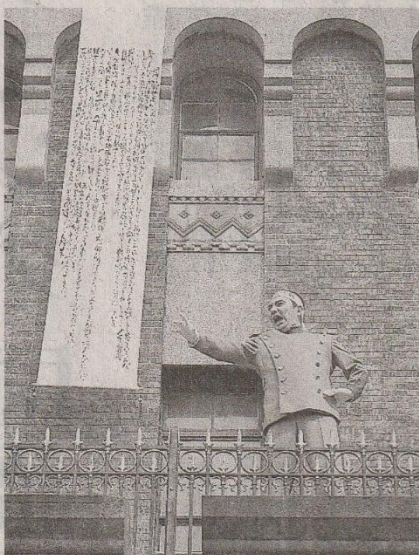
芸能界とつながりがある仕事が増えていた時期でした。メジャーな芸能プロダクションからお誘いもいただきました。「あなたの世界をさらに多くの人に広めたいのなら喜んでお手伝いします」と、僕の仕事場にも通ってこられて。

自分のやるべきことは即効薬か、それとも漢方薬かと考えました。芸能界の仕事は即効薬でパツと効くけれど、すぐに効果は薄れます。どちらも大事なんです、僕の手がけているのは、何十年も

美術家

### 森村 泰昌

12



森村泰昌「なにものかへのレクイエム(MISHIMA 1970.11.25-2006.4.6)」(2006年)＝本人提供

かけて宿題を解くようなことだから、やっぱりじわっと効いてくる漢方薬としての芸術なんです。それでお誘いはお断りしたのです。

《06年、三島由紀夫に扮するパフォーマンスを発表。20世紀がテーマのシリーズ「なにものかへのレクイエム」を開始する》

あの頃から、自分にとっての「サイレントの時代」から「トリーの時代」に入ったなと思うんです。映像作品をつくるようになって「声」もセル

フポートレートの重要な要素だと気づいた。三島やチャプリンの映画「独裁者」を扱った作品では、ダイレクトなメッセージを大声で叫んでいます。

高校時代、同級生が討論していた

政治や社会問題に対して、自分の言葉を持たなかった。でも芸術という分野でなら、自分なりの言葉として返せるのではないか。芸術はAかBかの対立軸ではなく、むしろ様々な見方や感じ方のプラットフォームになれるんですね。

《女優」シリーズから一転、「なにものかへのレクイエム」ではレインやゲバラら男性に扮した》  
自分の中の男性的な要素への嫌悪が、子供の頃からありました。でも「女優」を続けていたら、男性になることに抵抗がなくなってきた。言い過ぎかもしれませんが「着脱可能な身体」のようなイメージを描けるようになったのかもしれません。(聞き手・田中ぬれ奈)

# 五口ろ

—— 人生の贈りもの ——

## 焚書の展示 忍び込ませた「表現」

《「なにものかへのレクイエム」シリーズで「男性をテーマにできるようになった」という》

セルフポートレート作品の中で女性に扮し続けていると、女性的なものにも男性的なものにも引きずられなくなってくるんです。

「何もかも扮することなのではないのか」という実感を、身体的に受け止めるというか。

子供の頃から男性としてやってきた自分も、知らない間に男性に扮していたのかなど。「なにものかになる」というテーマで何十年も作品制作を続けるうち、扮することがそれなりに板につきはじめてきたのかもしれないね。

《ヨコハマトリエンナーレ20

美術家

### 森村 泰昌

13



森村泰昌さん。「本当に芸術でよかったなと思いますね。学者とか評論家とかだったら、もう少しパシッと言わないと駄目ですね」M I K I K O 撮影

14でアーティストティック・ディレクターに就任。焚書が題材のブラッドベリのSFにちなみ、展覧会名を「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」とした。僕の就任には期待がかけられていた。エンターテインメント性を盛り込んだキャッチーなアイデアが出てくるのでは、集客力アップにつなげてくれるのでは、とか。でも、そうはならなかった。

特定秘密保護法反対のデモが若い人の間で広がったりしていた時期でした。表現の自由が奪われたら芸術は確実に死にますね。そういう危機感から、記憶や忘却、検閲や沈黙といったシリアスなテーマとなりました。結果的にはこの

テーマが、日本も含め世界各国で現実のものとなってしまった。

とある理由で服役経験を持つ作家を出品作家に加えようとしたんですけど、やはり難しかった。そこでちょっとしたイタズラをやりました。世界で1冊だけの本を制作して展示し、最終日に燃やすというプロジェクトがありました。開催の直前、その人をこっそり展示室に招き入れ、この本の中に絵と文章を書き込んでもらった。誰も知らないうちに、出品作家に仕立て上げたのです。

先日、当時のキュレーターの一人に話したら「知ってましたよ」と。見て見ぬふりをしてくれていたんですね。（聞き手・田中あれ奈）

# 五口ろ

—— 人生の贈りもの ——

# 見守る人と やっぱり一人遊び

《71歳の今も、生まれ育った大阪を拠点に精力的に制作を続ける。家族は妻・利弥さんだ》

利弥さんは最初、一人のファンとして現れました。あの人は、僕の一人遊びを許容してくれるんです。芸術表現自体に立ち入ることはせず、その結果をいつも楽しみにしてきている。一人遊びをさせておかないと死んでしまうと、わかっているのではようね。

一人遊びの癖は子供の頃から変わっていないと思います。身勝手とは思いつつ、まあサンクチュアリなんでしょう。利弥さんをはじめ、実に多くの人々がこのサンクチュアリを見守ってくれているのだと、今更ながら身にしみてわか

美術家

森村 泰昌

14



森村泰昌「適塾の集い」(2023年)。大阪大学の学生たちが塾生に扮し、大阪市内に現存する適塾で撮影した。本人提供

ってきました。相変わらず子供のままの気もする一方、少しは大人になったのかもしれない。

《4月、大阪市の大阪大学中之島センターで新作を公開する。緒方洪庵に扮した自身と、適塾生に扮した学生という他者が作品内で共存する、異色の森村作品だ》

僕にとって初めてのパブリック・アートです。私事ではなくパブリックであることが重要と考えて、学生さんを募集したんです。彼らは作品に深く関わる形で鑑賞者になる。僕の作品の中に、みんなは半分ぐらい入ってもいいよ、という感じ。サンクチュアリよ、という感じ。意味では、僕の扉を開いたという試みです。にとっては画期的な試みです。

《人に慣れて、森村作品はやがて「自画像的」でなくなるのか》

自画像、すなわち「私とは何か」というテーマは最後まで残るのでしようね。今もパーティーや講演会で人に会うのは大の苦手。講演会は事前に何日も一人でお稽古します。一人芝居そのものですね。近所の猫や雑草を相手にしている方が、精神状態ははるかにいい。

21世紀は自画像の時代の終焉なのかと感じます。それでも、このテーマを追いかけつづける。自画像の時代のアンカーなのかなという自覚が、少しありますね。

(聞き手・田中えれ奈) 〓おわり  
◆ 次回は、アナウンサーの山根基世さんです。